



## 大分郡市医師会の近況報告

大分郡市医師会

理事 河野 義久

平成24年11月3日大分郡市医師会副会長の北真治先生が急逝されました。前日の総務部会には元気なお姿でいつものように活発にご意見を述べておられました。いつもにこにこしていて温厚で、低いよく通る声で切れ味のいい論客の北先生でありました。残念ではありません。北先生は大分医科大学の3期生です。呼吸器内科をご専門に大分市敷戸で、「医療をより気軽に、より良質に提供すること」をモットーに、平成11年に診療所を開業されました。平成16年より大分郡市医師会の理事となり、平成22年から副会長としてご活躍されています。いろいろなことに知識が豊富で我々のシンクタンクであり、感染症対策、学校医の問題、特に脊椎側湾症の学校検診、CKD病診連携システム作りには積極的に取り組んでいました。一昨年の大分県医学会は先生がリーダーで、一般演題の他、「地域の医療と介護の連携」をテーマに指定演題を医師のみではなくメディカルの方にも発表してもらうというユニークなアイデアを出されました。昨年の10月には前ベトナム国立国際医療研究センタープロジェクトディレクターの工藤宏一郎先生をお招きしての「H5N1鳥インフルエンザ研修会」を主催されました。また当医師会の一般社団法人化のための定款作成にもご尽力されました。我々大分郡市医師会の巨星を失った感があり誠に無念ではありますが、心からご冥福をお祈りします。

平成24年8月25日「来たるべき南海トラフ巨大地震に地元医師会はどう備えていくのか - 東日本大震災 いわき市からの提言 -」をテーマに、大分県災害医療研修会を大分県医師会との共催で開催しました。最初に大分県生活環境部防災危機管理課 後藤大課長から「南海トラフの巨大地震と大分県地域防災計画(地震・津波対策編)と題してご講演をいただき、続いて福島県いわき市医師会長 長谷川徳男先生より「東日本大震災 そのとき地元医師会はどう動いたのか」のご講演がありました。その後それぞれご専門の8人の先生にパネラーになっていただき、「情報の収集と共有」をキーワードにして、想定される被害を最小限に食い止め、Preventable death (予防できる死)を最大限救い、早期の地域医療復興を図るため、地元医師会として何を備えていくべきかを討論していただきました。途中からいわき市保健所所長の新家利一先生にもTV会議システムSkypeを使って討論に参加していただきました。フロアからも発災後の安否確認の方法の提案、避難所医療を支える保健師さんの派遣について等活発な議論がありました。

最後に長谷川会長から九州北部豪雨災害義援金が半澤会長へ授与されました。まとめを大分郡市医師会のホームページに記載していますので是非ご覧ください。

最後にうれしいお知らせです。第1回日本医師会赤ひげ大賞を大分郡市医師会の中野俊彦先生が受賞されます。先生は大分市奥で吉野診療所を開設され、地域の方々と一緒に合鴨農法や蛭の里作りを手がけられ、正に健康を中心に地域住民の生活を支えておられます。我々が手本として尊敬する先生の受賞、心からお祝い申し上げます。



## 「認知症と微分的認知」

速見郡杵築市医師会

理事 佐藤 素生

速見郡杵築市医師会の地域の人口は6万人強で、高齢化率は26.8%の県平均に対し、杵築市は31.7%、日出町は24.8%となっております。認知症は近年大きな問題になっており、当然高齢化の進んでいる当地においても人々の関心は高まっております。しかし、一方で老化や死に対する人々の容認が低下しているように感じる事が多く、先日も八十過ぎの患者さんが他院で老人性白内障と言われたと憤慨していました。老人性白内障ではなく、ただの白内障だそうで自分には老人性という言葉は当てはまらないのだそうです。又、本人だけではなく家族も同様であり、百歳近くの老人にも抗認知症での投薬にたより、不老不死のみを追い求めているようです。認知症が問題となる老人社会なのに人々が自らの老化を認めない社会になっていて、老人性痴呆症を高齡者認知症と呼び変えても senile dementia には変わりはないのであります。

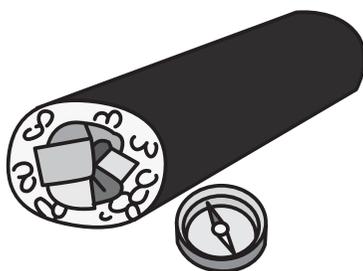
認知症で問題となるのは記憶の低下もさることながら、それに加え異常行動等の周辺症状です。これに関係し、懐古趣味の影響で最近勉強し直した電気物理で考えたことがあります。豊後高田市の昭和の町やおじさんライダー、おじさんに売れているスポーツカーのトヨタ86等、私も昔を懐かしむ年齢になったのか、昨年5月突然少年時代の趣味を思い出しました。そして8月に第一級アマチュア無線技師の国家試験を受験し合格することができました。この勉強を通じ長年の疑問であった生物的感覚と無機的刺激の大きさの関係、例えば音の大きさであるデシベルや、低酸素刺激と換気量の関係に対数が用いられることの意味、あるいは、プレエンファシスとデエンファシス（減衰しやすい高域を増幅して送信し、受信側で高域を減衰させ信号と雑音の比、シグナル/ノイズ比すなわちS/N比を改善させることができる）に微分回路、積分回路を用いる意味と生物との関係など多くの事柄が繋がってきたように感じました。

この新しく得た知識と試験の合格を自慢したいため友人の精神科医に話したところ、とても面白い話をしてくれました。統合失調症の人の認知を微分的認知といい、刺激を微分して認識するため周囲の小さな事柄を大きく重大にとらえ、しかも同時にシグナルと同様にノイズも微分してしまい混乱が大きくなるようです。元々これは、かすかな兆候を予測し、危険から身を守る必要のあった時代の原始狩猟民族的なものであるそうです。原始には人類が生き延びるために微分的認知が役割を担っていた可能性があります、

現代社会では異質なものとなったのでしょうか。ところで、この微分した刺激を積分してS/N比を改善させることが出来ないのでしょうか。できるとすれば統合失調症の人ではそうでない人よりもS/N比の改善をより良好にできるのでしょうか。また、ドルビー回路のようにS/N比を高くする事が人々の認知においても可能となるのでしょうか。

さらに、興奮性の刺激伝達物質が受容体を過剰に刺激するために起こるとされる認知症の周辺症状もS/N比を改善させることが出来ないのでしょうか。アマンタジン誘導体であるメマンチンはどうでしょうか。この薬はノイズをフィルターにかけるように働くようですが、認知症の場合ノイズは大きくなっていますがシグナルは強調された状態ではないようです。一般にノイズをフィルターにかけただけではS/N比は改善しません。生体の刺激に対する反応曲線を利用し、減衰しやすい信号を強調しておくことが大切です。さらに受信機では古くなると確実に内部ノイズが増え、プレエンファシスも意味がなくなり最終的には取り替えることが必要になります。

原始の人々が自然現象の変化を敏感に察知することが生存するために必要であったように、現在の人々も生き抜くためには世の中の急激な変化を敏感に察知することが必要となり、感覚がより微分的になる傾向があると感じます。微分的認知になっているため、ノイズも強調され、事が重大になり、老化は我慢できない事であり、誤った方向へ物事の認知が向かって行くように感じます。微分的認知された世の人々の感覚を積分的にし、混乱を大きくしないようにするにはどうすればいいのでしょうか。



# 郡 市 医 師 会 だ よ り



## 「ファビオラの風」

中津市医師会

学校担当理事 酒 井 昌 博

明けましておめでとうございます。中津市医師会 学校担当理事の酒井でございます。大分県医師会会員の皆様には穏やかな新年を迎えられたこととお慶び申し上げます。中津市では、昨年10月中津市民病院の新築移転がなされ、大分県北部医療圏のみならず近接する福岡県地域を含めた24万人医療圏における基幹病院であり、小児救急センター・地域周産期母子医療センター・救急医療・地域がん診療連携拠点病院として始動し地域の中心的な役割が期待されます。

中津市医師会事業の一つにファビオラ看護学校の運営があります。今回、学校担当として中津ファビオラ看護学校をご紹介したいと思います。

### 校名“ファビオラ”の由来



校名の由来について説明いたします。初めて耳にする方もおられると思いますが、本校の校名となった“ファビオラ”は、1600年前に公共的な病院を創立した最初の人です。ローマ貴族の出身で修道生活に入った後、生涯を慈善事業と病者に献身し、紀元390年に彼女の努力でローマに最初の病院が建てられました。ファビオラは、病める人々のケアを献身的に実地に看護を行った先人として評価され、“人間愛・慈善・おもいやり”のファビオラ精神を受け継ぐべく校名にファビオラの名前を冠し、その精神を校訓としています。

前医師会会長川島真人先生がファビオラを紹介され、名付け親となっています。

### 中津ファビオラ看護学校

前身の中津市医師会立中津准看護学院は昭和41年に設立され、29年間で27回生が卒業しています。

そして、中津ファビオラ看護学校は、地域での准看護師、看護師育成の為に平成7年4月に創設されました。

中津市内高台にある永添の地に移転し平成7年4月8日に開校しています。准看護学科、看護学科（2年課程昼間定時制）で、定員は准看護学科30名、看護学科40名です。

中津ファビオラ看護学校が開校され昨年で18年の年月が経ち、准看護科第18回生、看護科第15回生が卒業しています。准看護学科、看護学科 総勢180名で、規模的に小さい学校ですが、准看護学科は、昭和41年中津市医師会立中津准看護学院設立より数えますと46年間の歴史があり、創設以来現在に至るまで資格試験の全員合格が続いております。看護学科でも国家試験において県下で他に引けを取らない合格率を見えています。平成7年開校以来 准看護科362名、看護科545名が卒業し、中津市医師会内に251名が就職、本校看護学科へ176名が進学しています。



准看護学科の学生は、年齢・生活背景が異なる学生が多く、家庭の主婦や大卒や中卒で他の職種に就いたが、以前からなりたかった看護師への道があると受験する方が多くみられます。彼らの意識は高く、授業・実習に目を輝かせて望んでいます。看護学科に進学する者もいれば、市内医療機関に就職し地域の医療・福祉を支える力となっています。看護学科は、准看護師資格を持つ学生が働きながら国家試験受験資格が得られる課程で、多くの学生は中津市内の施設で就業しつつ勉強をしています。准看護師資格を持っているが諸事情で進学しなかった人が、今また勉強をしたいとの意欲を持って看護学科受験する方も多くおり、地域にこのような看護教育機関があることは大切だと思います。看護学科の学生も卒業後は、中津地区周辺医療機関へ就職を希望するもの他地域への就職・進学を希望するものと様々な進路がありますが、将来は中津市の医療現場で、“中津育ちの看護師”として活躍する事を願います。

### 校歌“ファビオラの風”

ファビオラ看護学校のある場所は、中津市内の小高い丘にあり夏は涼しい風が吹きます。そんなファビオラ看護学校の校歌が“ファビオラの風”です。平成18年、当時の学校長であった川島真人先生の依頼で、中津市在住の黒田義輝氏に作詞作曲して頂き生まれた校歌です。入学式、戴帽式、卒業式など学校行事の折々にみんなで合唱しております。とても綺麗なメロディーと優しい歌詞で心に残ります。歌詞が丁寧で優しくファビオラ精神を表していると思います。これを歌い学生時代を過ごしたファビオラの学生は、ファビオラの人間愛・慈善・おもいやりの気持ちにあふれる看護師・准看護師として歩き出すと思います。



昨年、ファビオラ看護学校の校舎の改築が行われました。築後17年経過した経年変化と近年男子学生数が増加したため、環境の良い校舎で安全に快適に学習ができるようにとの配慮で、医師会員の方々のご理解で成されました。二代学校長の木下清弓先生が愛情を込めて“ファビオラの子供達”と呼ばれた卒業生たちが、多く地域で活躍してくれることを願うが故だと思います。また一昨年ファビオラ看護学校卒業生(5回生)が初めて教員として学校に戻ってきてくれました。次の世代への風が吹いた気がします。

最後に、大分県医師会より看護学校へ毎年の補助金御援助頂き誠に感謝いたします。地域医療・福祉のために看護学生の育成に努力していきたいと存じます。本年も皆様に良い年でありますようにお祈り申し上げます。

**ファビオラの風** 作詞・作曲 黒田義照

いのちの 声なき声が きこえますように  
 心を澄ませたい  
 恋愛の姿で  
 あの白さに負けないように  
 自分色の ひかりを はなち  
 ややまの 緑につつまれて  
 前を向いて 一歩づつ  
 ファビオラの 風の中  
 胸に夢を描いて  
 ファビオラの 光の中  
 今この道を 歩き出す

いのちの 輝く光を  
 見失わぬように  
 心を澄ませたい  
 おもいやりの姿で  
 人を愛する このおもいを  
 看護(みとり)の めくもりにして  
 学び舎の 香りに つつまれて  
 前を向いて 一歩づつ  
 ファビオラの 風の中  
 明日への扉を開けて  
 ファビオラの 光の中  
 今この道を 歩き出す  
 ファビオラの 風の中  
 胸に夢を描いて  
 ファビオラの 光の中  
 今この道を 歩き出す

**ファビオラの風**  
作詞・作曲 黒田義照

- いのちの 声なき声  
きこえますように  
心を澄ませたい  
恋愛の姿で  
あの白さに負けないように  
自分色の ひかりを はなち  
ややまの 緑につつまれて  
前を向いて 一歩づつ  
ファビオラの 風の中  
胸に夢を描いて  
ファビオラの 光の中  
今この道を 歩き出す
- いのちの 輝く光を  
見失わぬように  
心を澄ませたい  
おもいやりの姿で  
人を愛する このおもいを  
看護(みとり)の めくもりにして  
学び舎の 香りに つつまれて  
前を向いて 一歩づつ  
ファビオラの 風の中  
明日への扉を開けて  
ファビオラの 光の中  
今この道を 歩き出す  
ファビオラの 風の中  
胸に夢を描いて  
ファビオラの 光の中  
今この道を 歩き出す

(平成18年2月作成)

# 郡 市 医 師 会 だ よ り



## 「国東市医師会の現状と諸問題」

国東市医師会

副会長 梶本定秀

国東市医師会は現在、A会員19名、B会員19名、老会員3名の計41名で構成されていて、3病院と18診療所の計21の医療機関があります。国東地域(国東市と姫島村)も御多分に洩れず過疎化と高齢化に見舞われ、地域と同様に当医師会も会員数の減少と高齢化が問題となってきています。

当医師会が地域の医療・福祉を担う役割の1つとして、介護認定審査委員会の合議体長を努めることがあります。国東地域では9合議体が各々月1回、1回30件の審査を行っており、介護保険発足以来ずっと同一の医師が合議体長を努めて参りました。しかし長年の疲労から、交代を希望する声が年々高まっていました。それにも関わらず、交代する医師が見つからずズルズルと続けることになり、これがかなりの負担となっていました。

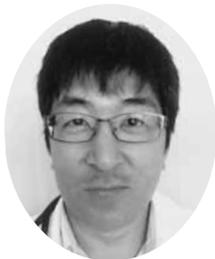
そこでA会員は平等に負担し、B会員にもある程度負担してもらおう方策として「1合議体2合議体長制」を3年前より開始しました。これは1つの合議体に医師を2名配置し、交互に出席して合議体長を努め、2年毎にローテーションするというものです。これにより負担は半減し、更に担当から外れる期間を設けることができました(8年毎に2年間ですが)。しかしながらこれは現在の会員数に基づいたものですから、今後会員数が減少すれば(特にA会員数)、また新たな方策を模索しなければなりません。

もう1つ地域に対する役割として、一類疾病に対する定期予防接種の集団接種があります。最近ではほとんどの自治体が定期予防接種は個別接種を実施しているようですが、国東地域では小児科が国東市民病院しかないという事情のため、現在でも集団接種を実施しています。集団接種には色々議論もあるでしょうが、当地域では前述の事情により個別接種は困難であり、また集団接種のお陰で県下随一の接種率となっております。

予防接種の種類が増加により、会員の負担も増加してきていますが、高接種率維持のために集団接種は是非とも継続していきたいと思っております。

その他、学校医の分担問題など少会員数に起因する問題が多々あり、次第に困難な状況になっていくことが予想されますが、何とか対策を講じて地域の医療・福祉を堅持していかなければなりません。

以上、小規模医師会の現状と、会員数が少ないために生じる問題について報告させて頂きました。



## 「厳しい地域医療の現実」

豊後高田市医師会

監事 安部 康生

東京から大分に戻りあっという間に10年経過した。この度初めて大分県医師会会報の「表紙」と「郡市医師会だより」に投稿することになった。

豊後高田市は大分県北部の宇佐市・国東市・杵築市と隣接し、人口総数24,032人、15歳未満人口2,783人、15～64歳は13,066人、65歳以上は8,183人、豊後高田市の総人口に対して65歳以上の高齢者の占める割合は34.1%、65歳以上の独居老人の人口は2,264人、出生率0.6%、死亡率1.5%、となっている。人口3万人を目指す魅力ある町づくり対策や第2子の保育料無料化政策など懸命な努力がこれまで行われてきたが、少子高齢化・過疎化は進んでおり、2012年4月25日に発表された大銀経済研究所の将来人口推計では、豊後高田市2010年23,906人、2020年21,311人、2030年18,735人、と予想を遙かに上回る過疎化進行と超高齢化社会を示唆する深刻な数値が提示された。安心・信頼感のある医療を提供出来る様に豊後高田市医師会では行政とも連携をとりあい地域に根差した活動をこれまで行ってきた。

大分に戻り今日までの10年間、過疎地医療従事者の立場で現実的に痛感した問題点は、(1)少子高齢化、(2)豊後高田市には小児科診療所が無い(大分県下では豊後高田市を含めて4市町村で小児科常勤医が不在である。)、(3)介護施設の不足、(4)高齢者長期入院治療受け入れ病院の不足などである。過疎地域特有の財政困難が公共施設やお年寄りが簡便利用出来る交通手段の不足というものを引き起こし、地域産業衰退から雇用不足を誘発、その結果若年青年層は外部への労働に出て平日不在となる。そうした様々な要素が起因となり最終的に孤立した独居老人が増加する。地域医療の末端を担う開業医は訪問診療という形で孤立したお年寄りの健康維持のための対応に追われる毎日である。自宅療養が困難な独居老人の受け入れ可能入院施設が見つからない事もしばしば。また老人介護施設にも空きは見つからない。小児科医不在に関して、不慣れで専門的知識のない内科医が出来る応急的治療を行い、必要に応じて隣接する市の小児科専門医へ紹介する橋渡しの役を担っている。行政や隣接する他医師会と連携し改善すべきことはまだまだ沢山ある。

個人的な事を少し。ライカというカメラでモノクロ写真を撮るのが好きで今回写真も投稿してみた。レントゲンは完全にデジタル化の時代となった写真もそろそろフィルムの時代が終わろうとしている。しかし、モノクロの素朴で温かみのある所が僕は好きだ。

これからも地域医療において人間的に向き合いホームドクターとしての責務を果たせる様一生懸命に診療を続けたいと思う。



## 「臼杵市での認知症対策」

臼杵市医師会

理事 藤野 孝雄

認知症に対する早期発見・予防・啓発活動は全国各地でも以前より行われています。当医師会も平成18年より大分大学第三内科に支援していただき会員の先生方を対象に認知症の診断・治療に関する研修会を実施してきました。

全国的に65才以上の高齢化率は増大する一方です。臼杵市も高齢化率は31%を超えており、人口は減少状態にあります。今後の高齢化に伴って認知症の有病率も増加していくと予想されます。このため一般市民を対象とした認知症検診は喫緊の課題ですが、医師会と大学だけでの検診実施は困難であり行政の協力が必要不可欠と痛感しておりました。

変化が起きたのは平成21年です。総務省、厚労省から出向で市に着任された二人の方の協力を得て、臼杵市での認知症対策は急速に進展しました。具体的な活動は以下の通りです。

1. 医師会、大学、臼杵市が共同で「臼杵市の認知症を考える会」を設立し、医療・看護・介護および行政の各職種が連携して認知症対策を行う。
2. 認知症早期発見と発症予防および啓発のために、年4回の地域住民を対象とした認知症検診活動を行う。
3. 認知症啓発活動の一環として、全市民を対象とした2年に1回の市民公開講座を開催する。

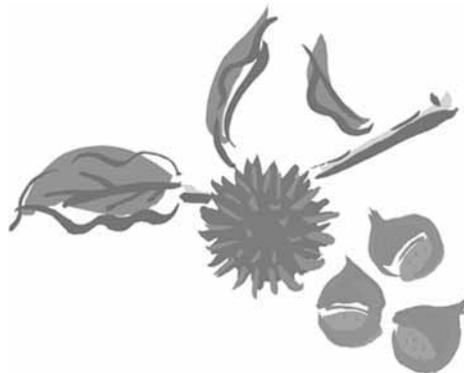
平成22年11月に開催した市民公開講座には市内外から1,600名もの方々に参加していただき、嬉しい悲鳴をあげるとともに認知症に対する一般住民の関心の高さを改めて認識しました。地域認知症検診は既に5か所で開催し、講演およびタッチパネル式物忘れ診断システムを用いた認知機能検査を実施しました。

ただし地域住民の認知機能評価を行うに当たって、検診活動だけでは不十分です。この観点より我々はタッチパネル式診断システムを医師会で購入し、各会員の先生方に順番で使ってもらい、65才以上の外来受診者を対象としたスクリーニング検査を実施中です。現在既に3医療機関で実施済となりました。今後もこのスクリーニング検査をできるだけ多くの会員の先生方に行ってもらおう予定です。

今後の課題として、認知症の患者さんに対するケアが挙げられます。現在患者さんおよびその家族の方々に対する支援体制は十分とはいえません。この点については認知症を考える会が中心となり、看護・介護に携わる職種を対象とした症例検討会を通じて支援体制の構築を進めていく予定です。

昨年より県病の法化図先生を中心に、認知症の診療に関わる全ての職種が参加した大分県認知症カンファレンスが立ち上がっています。また、県内各医師会主導で認知症の研修会が行われています。このような活動を通して、さらには各医師会が連携することによって今後の大分県全体の認知症診療は大きく進展するものと期待しております。

今年も2回目の認知症市民講演会を11月25日（日）に臼杵市民会館で開催予定です。興味のある先生方はぜひ御参加下さいますようお願い申し上げます。





## 「地域医療と今後の取り組み」

津久見市医師会

理事 秋 岡 健一郎

今年度より津久見市医師会執行部は会長に深江先生，副会長に大石先生，理事に小田先生，後藤先生，秋岡の計5名の新執行部となりました。津久見市医師会は現在市民健康管理センターの赤字の解消に向けての経営改善，医師確保など問題山積みの状態となっています。

さて，話は変わりますが私は開業して5年目となりました。祖父の代より引継ぎ過疎地域の訪問診療を行っています。とはいっても津久見市自体が人口2万人程度，年々人口減少が進み津久見市自体が過疎地域となっています。

訪問診療では一人暮らし，認知症，癌の終末期の方などさまざまな方がいらっしゃいます。訪問地域も広がってきており津久見市の半島の端から端まで訪問をしています。移動時間は1時間弱かかることもあります。

現在津久見市では認知症ネットワーク，がん患者支援のシステム作りを開始しています。今後増加してくるがん患者さんに対して病院だけではなく施設，在宅にての緩和ケア，看とりをどのようにしていくかが課題となってきます。津久見市では今回行政，訪問看護ステーション，薬剤師，歯科医師などが集まり会合がもたれました。

認知症ネットワークに関しては，市民の方々も多く認知症サポーターの講習を受講されています。当医師会では認知症の専門の先生がいらっしゃらないため会員の先生方，津久見中央病院の先生方などがオレンジドクターを取得するための講習会を受講されています。また医師会主催の勉強会なども今後積極的に実施していく予定となっています。現在認知症の患者さんは国の予測より早く，すでに300万人を突破したとの報告があります。

今後は一人暮らしで認知症の方も増加すると思われるので当医師会としても行政，市民の方々などの協力を得て認知症のネットワークを構築していきたいと思っています。

# 郡 市 医 師 会 だ よ り



## 中津市と中津市医師会

中津市医師会

理事 小路 眞 護

中津市は、豊前中津藩（初代藩主黒田官兵衛孝高，号如水）の城下町で、青の洞門や羅漢寺，福澤諭吉旧居，中津城（石垣）などの文化財や歴史的建造物，市域南部の景勝地である耶馬溪を抱えた観光都市です。旧豊前国に当たり，福岡県北九州地方（北九州市や行橋市，豊前市，築上郡，京都郡など）との結び付きが強く，特に旧上毛郡地域であった豊前市，上毛町，吉富町（古くは旧下毛郡と合わせて三毛郡というひとつの郡であった）は，経済・文化・生活面で中津市と一体となっているようです。そのため，山国川を挟んで隣接する福岡県吉富町・上毛町は，築上郡の中心都市である豊前市との合併を拒否して中津市との越境合併を視野に入れているとの声も聞こえます。経済的には北九州都市圏（同都市圏の5パーセント通勤圏）にありますが，小都市圏である中津都市圏（約217,000人）の中心都市としての役目も担っており，小都市圏としては全国屈指の規模を誇っており，総務省が提唱する広域定住自立圏構想における九州周防灘地域（大分県の宇佐市，豊後高田市，福岡県の豊前市，築上町，上毛町）の中心都市となっております。

中津市の面積は491.09平方キロメートルと大分県全市で5番目の広さを持ち，人口は大分県内では大分市，別府市に次いで3番目に多い都市であり，平成24年6月30日現在85,872人（人口密度172人/平方キロメートル）で，最近までは大分市や福岡，本州方面への一貫した人口流出が続いていましたが（1995年から2000年の人口増加率は98.77%，2000年から2005年の人口増加率は98.54%），ダイハツ九州工場の進出のおかげで2005年から2010年にかけての人口増加率は100.00%とほぼ横ばいとなっております。中津市人口の大分県内総人口シェアは凡そ7%前後であり，人口分布としては旧城下町に人口が集中し，それを取り囲むように農村（県内最大規模の農業地帯）が，中津港近辺では漁村が開け，耶馬溪へと山国へ向かうにつれ過疎地となって行くといった状況です。年齢別（3区分）人口で見ますと，年少人口（14歳以下）は平成22年12,359人（14.7%）で減少を続け平成32年には総人口の11.9%にまで減少し，一方老年人口（65歳以上）は平成22年20,319人（24.1%）で今後も増加傾向で推移し平成32年には総人口の31.5%になると推計されております。中津市の平成20年度の出生率（人口千対）は10.0で大分県内の市の中で最も高い水準となっており，合計特殊出生率（現在の人口維持するに必要な値は概ね2.08とされている）は1.67で全国（1.34），大分県（1.44）と比較すると高い水準となっていることより，中津市は出産や子育てには適した環境であると推察されますが，それでも他の地方都市同様，人口の減少化，特に生産年齢人口の減少（平成22年61.2%から平成32年

56.6%)と少子高齢化が進み、医療・介護福祉ともに多くの問題(国民皆保険の破綻、老々介護・認々介護の増加など)が生じて来ております。

中津市医師会の歴史は古く、おそらく明治時代初期あるいは江戸時代まで遡るのではないかと推察されますが、残念ながらその歴史を纏めた記録はなく、最近になりようやく中津市医師会歴史編纂事業が医師会事業として動き出そうとしているところです。平成24年5月末日での会員数は、A会員66名、B会員89名の総数155名であり、最近の動向としては、A会員の若干の減少とB会員の若干の増加で総数変わらずとなっており、今後中津市医師会運営においてB会員への多角的な働きかけが重要となってくると考えられます。施設数は、病院11施設、診療所61施設、老健2施設、健診センター1施設の合計75施設であり、最近の動向としては、開業医の高齢化や跡継ぎ不在に伴う診療所閉院と若手医師の新規開業の伸び悩みによる診療所数の減少が目立ち、開業医の高齢化が進んでいることからその傾向は益々進むであろうことが推測され、少子高齢化が全国平均より5年前倒しできている地方都市にとり、その対策の担い手である若手開業医の育成が急務となっていることは明白であります。

中津市医師会事業の2本柱は、健診センターとファビオラ看護学校の運営であり、平成21年度にそれまでの懸案であった借入金の返済も完了し、余裕をもって他事業へも対応する考えでありました。しかし、右肩上がりの勢いのあった健診事業において、後期高齢者の生活機能評価が健診項目から省かれた事が一因と考えておりますが、平成23年度に健診受診者数が前年度比で500人程の減少(22,300人程度で、国保健診受診者が1,000人程度減少)、500万円程の売り上げ減を示しました。一方女性特有の癌の検診に対し行政主導で無料クーポンが配布された事もあり、個人健診者は500人程度増えましたが、これに関しては一過性の現象と思われ、今後も受診者数は伸び悩むことが予想され、健診による早期発見は、市民の健康維持の一助となり、地域の医療・福祉にとって望ましいことであることより、受診者数維持あるいは拡大に向け何らかの対策を講じる必要が切に感じられます。看護学校運営に関しましては、多くの医師会立(准)看護学校同様に実質赤字経営であり、恒例化しつつある看護学校会計への繰入れを如何に無くすかが課題であります。景気不安状況下では授業料の値上げは慎重にならざるを得ず、定員割れを如何に無くすかが急務となります。これは同時に看護師不足が深刻な問題となっている地方都市において、地元若手看護学生あるいは(准)看護師の都会への流出を如何に止めるかといった問題も含んでいると思われ。この問題を解決するためには、学力不足による中途退学や留年のない能力の高い学生(特に地元学生)に如何にファビオラ看護学校を選択してもらうかに掛かっており、そのためには学生から「是非行きたい学校」と支持されるような魅力ある校風や施設(男子学生対策や寮完備など)を築くと共に学校自体の社会的地位の確立と全国レベル以上のスキルアップを目的とした卒前卒後研修の強化に努めなければなりません。逆にこのまま、定員割れや卒業生の地元離れが進むと、実習受け入れ施設である病院への卒業生の就職も減ることとなり、そうなれば『労多く功少ない』病院が実習生受け入れを拒否する事態が生じる一因ともなりかねません。平成25年度からの新法人制度に関して中津市医師会は、今後も自由な発想で組織・事業を運営することが可能な「非営利型一般社団法人」に移行する道を平成24年5月総会において圧倒的多数で選択し、それに伴い定款の変更もスムーズに了承され、現在は上述

した問題を含む医師会運営上の諸問題に対し、末廣医師会会長を中心に理事会が一丸となって解決に努めています。

大分県北部医療圏域あるいは九州周防灘地区広域定住自立圏といった24万人医療圏の基幹病院である中津市立中津市民病院の新病院建設も順調に進み、平成24年10月1日開院予定となっているようです。鉄筋コンクリート造り、屋上緑化を有する地上5階(高さ20.7m)・塔屋1階、小児救急センターを併設する入院病床数250床の病院が出来上がりつつあり、その面容は実に頼もしく感じられます。長年の救急医療上の懸案でありました脳神経外科や整形外科の標榜も行うとのことで、当該科の医師の着任が期待されます。現在の池田正仁院長着任以来、病院機能の強化(診療科の整備と人材の確保)に努められ、各種の施設認定の取得も進み、一昨年は地域周産期母子医療センター、昨年は地域がん診療連携拠点病院の指定を受け、各種学会等の施設認定も着々と取得していると聞きます。中津市民病院共同利用運営も計画中であり、運営上の諸問題は生じてくるでしょうが、入院病床やCT・MRI等の機器を持たない開業医にとり有難い事であります。そのような好状況下、かかりつけ医も救急医療を含む第一線の医療機関となるべく日々新たな医学的知識の習得とスキルアップに努めなければならず、必要十分な学術講演会や研究会・研修会等開催により、その後押しをするのが都市医師会であるべきと思われます。





## 別府市医師会の現況

別府市医師会

常任理事 馬場 欽也

別府市医師会は四期目を迎えた河野会長のもと総務，地域保健センター，看護教育，地域福祉の四部門が連携し，役員一同，より一層団結して会務に当たっています。今期の重点項目の一つ目は，公益法人制度改革への対応です。平成25年4月1日より一般社団法人（非営利型）への移行のために，現在，定款変更や公益目的支出計画策定のための経理区部などを顧問会計士と共に協議検討を行っています。

二つ目は看護教育の充実です。超高齢社会を迎え，看護師不足のために病棟閉鎖に追い込まれるような会員施設の病院や有床診療所が出ないように，看護職員の確保は緊急の課題と考えます。看護学科・准看護学科の学生の一人でも多くが看護師，准看護師の資格を取得し，会員施設の即戦力となって地域医療を支えられるように看護教育部門を整備・充実する考えでいます。

そして三つ目として，これが最も重要で大きな事業となっていますが，IT活用による医師会主導での医療連携の構築です。「ゆけむり医療ネット」による医療連携は，すでに新別府病院，別府医療センター，鶴見病院など三つの基幹病院と接続を完了しており，平成25年度までには九大病院別府病院と運用を開始する予定です。またこれら別府市内の基幹病院と速見郡・杵築市医師会，国東市医師会などの東部医療圏の医療施設との連携も可能となるように別府市医師会を経由した試験運用も現在，開始しています。また，この「ゆけむり医療ネット」を通じて，別府市保険年金課とは特定保健指導に際し，主治医との情報交換にも用いています。さらに，医師会健診センターでは特定健診，がん検診などでの画像や血液検査結果などを精密医療機関や主治医に迅速に配信出来るシステムを地域医療再生基金の補助を利用して整備しました。また，検査センターでは，会員施設からの検体検査の依頼や報告が迅速に配信可能なシステムを構築し，医師会訪問看護ステーションでは訪問看護師と主治医とがiPadを用いた情報のやりとりも行っていきます。訪問看護ステーションでは昨年度に引き続き，今年度も厚生労働省のモデル事業である「在宅医療連携拠点事業」を継続実施しており，歯科医，薬剤師，行政，福祉など多職種の人たちとの連携による医師会が中心となった公正・中立な包括支援ネットワークシステムの構築を考えています。その他にもまだまだ多くの課題はありますが，別府市医師会は別府市と一緒にあって別府市民の医療・保健・福祉活動を支えると共に，会員の様々なニーズにも答えていけるよう河野会長を中心として，役員一丸となって取り組んでいます。

大分県医師会の先生方には今後もこれまで以上の御指導，御鞭撻の程，よろしくお願ひ申し上げます。



## 厳しい時代の地域医師会としての平素の活動 - 大分市医師会近況報告 -

大分市医師会

理事 植山茂宏

天災、経済苦境、そして国家方策の翻々のなかで、医師会としての方向性がなかなか見えにくい現状ですが、地域医師会としての大分市医師会の近況を報告いたします。

県医師会の会員の皆さまもご存じのとおり、大分市医師会は大分県では首市医師会の役割を担って参りました。これまでも、耳目を引く話題性に富んだトピックを発信することは数少なかったと思えます。その中で、黙々と着実に重ねていったことは、大分市医師会に限った事ではありませんが医療行政上での自治体との対応、中央の医政の情報収集と整理伝達、医師会立アルメイダ病院の経営、看護学校の運営、さらに地域の学校保健に参画し、産業医の手配や、勤務医会員の医師会参加の援助、医師会主催学術講演会や各科研究会のお世話など、なるほどどの地域の医師会も同じく活動しておられる内容ばかりだと思いかもかもしれません。加えて、年に1回大分市医師会医学会を開催し、発表内容を学術誌“アルメイダ医報”に掲載しております。特色と呼べるものはアルメイダ病院に県下では数少ない緩和ケア病棟が新設されたことに伴う緩和ケアの講習会を定期的で開催していることです。さらに対外的には、首市医師会の責務として九州各県の医師会との情報交換を通じ医師会の立地点を誤らないように留意してきました。

当医師会において、杉村医師会長が堅守を指示徹底され、歴代会長のもとで粛々と伏流してきた基本方針は、実務、雑務の責務を執行部と事務局が一体となって遂行することであります。医師会活動の大半は、地味な雑務ですが、雑務は“雑にこなしていい仕事”ではなく、きちんと果たして記録し継代いくことが次世代への責任と言えましょう。

また、視点を変えて、地域の患者さんの実態の把握に鋭意努めてきました。県医師会員のどなたもお考えのこととは思いますが、私どもはアルメイダ病院入院患者さんからの苦情や意見の報告を徹底させ、医師会役員と病院幹部との全体会議で内容を分析、対応を協議しております。大勢で吟味しますと新たな観点や対応策が浮かび、医師会のみならず一会員としても大変参考になり、今後の医師会運営・活動の上で貴重なセッションとなります。

以上、なんだか堅い活動報告となりましたが、他方、医師会員の親睦を一層高めるために役員で知恵を出し合うと卑近なことながら、重要なことに行き当たりました。医師会全体の忘年会の予算を増やして“うまい料理”をみんなで食べよう！との提案が担当理事より発案され、見事に参加者が増え何とも和やかなひとときが共有できました。定期的な親睦ゴルフ会での互いの凄腕の見せあいも盛んです。本年度より会員や医師会

執行部の情報誌として、“大分県医師会報”を創刊し、医師会執行部の動向、病院運営、会員情報、親睦ゴルフ大会、写真、短歌、俳句などの肩の凝らない内容としました。会員同士の顔の見える医師会をモットーに工夫を凝らしています。

人口に膾炙された中国のことわざに“小医は病を癒し、中医は人を癒し、大医は国を癒す”とあり、出典は唐の『備急千金要方』です。政治用語や経営用語としてしばしば用いられますが、私個人としましては、本格言の真意は、医療は、現場の細かいけれども決しておろそかにできない患者さんとの共有の問題を解決しつつ、少しずつ大きな行事や仕事へ携わっていくべきと理解しております。困難な時代に一般国民と同じく声を大にして不平不満を鳴らすだけでは解決にはつながりません。医師会執行部の本来の責務は医師会員の医療活動を守り、地域住民全体を見守ることを基本理念として確実に任務を果たしていくことにあり、言うべき時は時機を逸せず直言することにあります。

厳しい時代であるからこそ奇をてらわずに、当医師会はこれまで通り実務に精励し、医師会員の皆さま、地域住民全体の信頼をより高めるべく努めていく所存です。各位からのご意見、ご指導をいただけますれば幸いです。



(写真は、凄腕を競い合う？親睦ゴルフ大会より)



## 宇佐市医師会より近況報告

宇佐市医師会

副会長 西村正幸

宇佐市医師会は現在A会員45名、B会員55名、計100名で会長、副会長、各地区(宇佐・長洲地区、四日市地区、駅川地区、安心院・院内地区)から選出された5名の地区理事、2名の病院担当理事と宇佐高田医師会病院院長、2名の監事の計12名で構成される理事会で会務を執り行っています。目下もっとも腐心しているのは医師会病院の事業運営であります。宇佐高田医師会病院はこの地域で市民の健康をまもる砦となるという高い志のもとで設立され、二次救急病院として昼夜を問わず急患を受け入れ、今日まで脈々とその使命を果たしてきました。設立に尽力され、またその後、今日まで支えてこられた医師会の先輩の諸先生方、職員の方々ならびに病院のスタッフの努力あってのもので、私たちはこの事業を大切に守り、次の世代に引き継いでいかなければなりません。

昨年、創立30周年の節目を迎え、県医師会、近隣都市医師会、地域の各界の代表の方々に来賓としてご臨席頂き、盛大に記念式典を催すことができましたが、それとは裏腹に医師会病院の現状は医師不足という厳しい現実に直面しており、循環器内科に加えて呼吸器内科にもその影響がおよび、二次救急医療体制の維持が困難になりつつあります。医師会病院がその機能を維持し、その使命を全うするために、医師の確保が急務ですが、医師不足は深刻な社会的問題であり簡単に解消できそうにありません。老朽化しつつある病院の建て替え案の策定も懸案事項ですが、経済や医療保険制度の今後の動向、医師確保の将来的見通しなど経営環境はきわめて不透明で、医師会病院の将来構想が描けず、これも難しい判断を迫られています。新年度を迎え、徳光伸一新会長の下、広く会員や職員、そして地域社会の意見を集約し、この厳しい状況の下、存続可能な進むべき新しい方向性を得て、地域医療に貢献できる医師会病院であり続けたいと考えています。本号表紙の写真は宇佐神宮の11の末社の一つ椎根津彦神社で、宇佐高田医師会病院のすぐ傍にあります。社殿は失われていますが三つのほこらが確認されています。日本書紀には、紀元前667年、神武天皇が東征のおり、豊予海峡の難所で立ち往生し、漁師に助けられ海峡をわたることができたという伝承が記されています。天皇はこの地に上陸し、この漁師に椎根津彦の名を授けて社を建てたと伝えられています。今は、鮮やかな朱色の玉垣に囲まれ神聖なるたたずまいを見せていますが、ついこのごろまで生い茂る雑草に埋もれていました。昨年、宇佐神宮によってこの末社が整備されて、初めてその存在を知った次第です。



## 岩尾 仁 先生ご逝去

日田市医師会

理事 秋 吉 貴 文

鶴陽会 岩尾病院の岩尾 仁先生が2月4日ご逝去されました。先生には約半世紀にわたり日田市医師会にご尽力頂きました。1984年から1992年の間は日田市医師会長をお務めになられ、特に成人病検診センター並びに日田准看護学院創設におきましては多大なるご苦労されたとお聞きしております。私事では昔私が学生の時MUMPSに罹患しまして肺炎を合併、父も心配だったのか岩尾仁先生に診察して頂いたことがありました。岩尾仁先生は診察の最後に私の股間に手を伸ばし小さい声で言われました。「やはり腫れているか、子供が出来ればいいけどな」当然ORCHITIS合併でぱんぱんに腫れてとても痛かったのを思い出します。先生は医学に関して厳しいだけではなく自分自身にも厳しい方でした。わからないことを質問すると必ず数冊の文献が送られてきましたし、私の分野に関しましては逆に質問を受けることもありました。最後まで現役で御活躍された事に敬意を表したいと思います。

謹んで先生のご冥福をお祈り致します。

日田市医師会は日田検診センター、日田准看護学院、訪問看護ステーション、放射線診療所の運営を担って地域社会に貢献しております。2008年には公益法人制度改革3法が施行され暫定5年間経過後の2013年12月1日からはこの新しい制度に沿ってそれぞれの事業所が運営されることとなります。日田市医師会も他の医師会と同様にいろいろ試行錯誤しながら今後の事業計画を検討しているところであります。公益法人制度改革に加えて今年の2月には2年ごとに行われる診療報酬改定が公表されました。重点項目としては高齢化社会での対応は、病院での治療から在宅への早期移行することで、医療費の高騰を抑える。すなわち在宅医療の充実、リハビリテーション、がん医療、認知症、緩和ケア などチーム医療の推進。その他救急、産科、小児、外科等の急性期医療を適切に提供し続けることができるよう、病院勤務医等の負担の大きな医療従事者の負担軽減・処遇改善を求めた事です。今年は特に6年に一度の介護と医療保険の同時改訂だったことから、以前とは少し違った改訂となった気がしています。

日田市の高齢化率は平成26年には30%を超えると推測されています。地域の中で、高齢者がいきいきと暮らせる為にも、今後医療と福祉の連携により双方の情報がお互いに共有でき、在宅生活への移行がスムーズにできる事が課題であると思っております。

検診センター、准看護学院、訪問看護ステーション、放射線診療所はそれぞれ新公益法人制度に則った運営を図るとともに岩尾仁先生の教えを忠実に守り、市民の健康と安心を得られる様努力したいと思います。